NICU退院児のホームケアシステムに関する研究
総　括　報　告

（分担研究：　NICU退院児のホームケアシステムに関する研究）

仁志田　博　司*

研　究　目　的

新生児医療の進歩およびNICUの全国的な普及に伴い，従来では生存の望めなかった超未熟児や重症新生児が生存するようになった。それらの生存児の予後のみならず新生児全体の予後は医療の進歩にともない改善しているが，その恩恵を受ける児の対象が広がったため，急性期を過ぎても退院できずNICUに留まる児が問題となってきた。それらの，長期に渡って医療・看護を必要とする児のより良い医療として，1）発育発達の段階である児は可能な限り家庭でcareされるべきであり，また　2）NICUのより有効な利用という医療資源活用の観点から，NICU退院児を対象としたホームケアシステムが時代の必然として考えられるようになった。本研究は，NICUの長期入院児および障害を有して退院する児の実態を調査し，本邦に於ける望ましいシステムとは何かを検討し，その基本構想を提言することを目的とした。

研究成果の概要

過去3年間の本研究班のまとめとして，宮坂・竹内・我那覇他は小児在宅酸素療法適応基準を，山口・石崎・増本他は重症心身障害を有するNICU退院児のホームケアシステムにおける中間施設的な発達養育施設（仮称）の重要性を指摘し，その基本構想を提言とした。

在宅酸素療法は，すでに全国各地の施設において少数ずつながら行われているが，その対応はまちまちで，医師・家族の献身的な努力によって支えられているのが現状である。宮坂ら（国立小児病院），竹内ら（松戸市立病院）および我那覇ら（沖縄中部病院）はその各々の施設における経験から，在宅酸素療法の適応基準を：1）安定した呼吸循環状態が維持できること，2）安定した栄養状態が維持できること，3）家族の自発的な協力が得られること，4）緊急連絡体制が確立できること，を主要項目として作成し報告した。酸素に関しては，酸素濃縮装置や携帯用酸素ボンベの開発，さらに在宅における使用が保健制度上も認められるようになった。一方，成人と異なり自力で異常を告げることの出来ない幼児・児童においてはホームモニターの併用が必要であり，パルスオキシメータの有用性が認められたが，ホームモニターに関しては保健制度上の経済的保証や機器の補修点検などにまだ多くの問題が残されていることが指摘された。

重症心身障害児のホームケアに関し，増本は11例の自験例の母親とのインタビューから，母親が望んでいるのは，1）家庭の事情などの際に少しでも自由の時間が取れるための障害児保育所，2）救急の際の受け入れ病院であることを指摘した。

*　東京女子医科大学母子総合医療センター新生児部門

石崎他は新生児期より神経障害が明らかな58名の検討から，47名が再入院の既往がありそのうち21例は家庭の事情であり，また大半の50家族が核家族であるところからホームヘルパーなどの地域および行政からの援助の重要性を指摘している。山口は，訪問看護や保育施設に加え，24時間緊急体制や再入院受入体制のために従来の施設とは異なった発達養育センターの必要性を述べその構想をまとめた。

NICU退院児のホームケアシステムは時代の必然であり，NICUの高度な医療機能の有効な利用のためにも，精神神経発達の最も重要なときである乳幼児期のより良い医療環境としても確立されなければならないものであることが確認された。しかし，障害を持った新生児がNICUを退院すると，その後の入院は小児科などのNICU以外の施設となり，医療の連続性が途絶えがちとなる。そのNICUと小児医療機関の間を埋め，ホームケアシステムに医療の流れを発展させる具体的な提言として，既成の医療機関ではカバーしきれない，24時間緊急体制，再入院受入体制，家族指導，訪問看護体制，長期集中治療体制さらに障害児保育・訓練・リハビリが可能な，中間施設としての発達養育センターの設立の必要性が示された。さらに，地域特に行政の関与が，ホームケアの家族の経済的，物理的，精神的なサポートとしてきわめて重要であることも強調された。また，小児の在宅酸素療法適応基準（案）は，今後の本邦に於けるこの分野の基準案として重要な位置を占めるものと考えられる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

新生児医療の進歩およびNICUの全国的な普及に伴い,従来では生存の望めなかった超未熟児や重症新生児が生存するようになった。それらの生存児の予後のみならず新生児全体の予後は医療の進歩にともない改善しているが,その恩恵を受ける児の対象が広がったため,急性期を過ぎても退院できずNICUに留まる児が問題となってきた。それらの,長期に渡って医療・看護を必要とする児のより良い医療として,1)発育発達の段階である児は可能な限り家庭でcareされるべきであり,また2)NICUのより有効な利用という医療資源活用の観点から,NICU 退院児を対象としたホームケアシステムが時代の必然として考えられるようになった。本研究は,NICUの長期入院児および障害を有して退院する児の実態を調査し,本邦に於ける望ましいシステムとは何かを検討し,その基本構想を提言することを目的とした。